

ティル・オイレンシュピーゲルの退屈しのぎ話

2013年2月21日 岡部由紀子

Till Eulenspiegel (ティル・オイレンシュピーゲル) の名に由来するドイツ語の Eulenspiegel は、ペテンやごまかし、悪ふざけなどを意味する名詞です。今もなお人々の記憶に深く刻み込まれている人気者、オイレンシュピーゲルとは、いったい何者なのでしょう。



1515年に発行された民衆本の表紙の版画 →
手にかかっているのは、フクロウ (Eule) と鏡 (Spiegel)

1510年に出版された民衆本により、オイレンシュピーゲルの名がヨーロッパ中に知れ渡る

著者：Hermann Bote (ヘルマン・ボーテ) 1463-67年生れ、1520-25年没。

ボーテの父は、北ドイツのハンザ都市、ブラウンシュヴァイクの鍛冶屋の親方であり、市参事会員でもあった。足が不自由だったボーテは親の仕事を受け継ぎず、賤民身分の徴税官吏や、市参事会堂ケラーの管理人、煉瓦工場の監督などの仕事に従事しながら、匿名で諷刺精神に富んだ多くの著作を残した。15世紀のニーダーザクセンを代表する文筆家であるが、最近になりさまざまな作品の著者であることが判明。

ボーテの書いた『ティル・オイレンシュピーゲルの退屈しのぎ話』は、発行されるとベストセラーとなり、瞬く間にヨーロッパの各言語に翻訳されて、以来その名が悪戯者の代名詞のように使われている。

オイレンシュピーゲルが生きていたとされるのは14世紀前半、ボーテは16世紀初めに彼の話を書いた。

ボーテの本が出版される前にも、さまざまな悪戯者の伝承や、滑稽話の書物があった。

ボーテはそれらを取り入れながら、自らの生活体験や時の話題、社会批判を盛り込んで、独自の観点から96話からなるオイレンシュピーゲルの伝記を創作した。寄辺ないボーテが、放浪の旅人に自分を重ね合わせて、物語の中でもう一つの人生を生きようとしたとも思われる。

名前の由来は、「尻を拭え」？「フクロウと鏡」？ 実在した家名？

*1510年に出版されたの民衆本は、低地ドイツ語で書かれていた。

Dyl Ulenspiegel ulen … 拭く、きれいにする Spiegel … 尻

*1515年に発行された高地ドイツ語の翻訳本

Ulen (Eule) … 梟 Wl(ul) … オランダ語で愚者 Spiegel … 鏡

*ブラウンシュヴァイクに、14世紀前半 Ulenspeyghelsche という名があった。



中世、愚か者(Narr)が持つ鏡は自己愛や虚栄、神の否定などをあらわす一方、自らの愚かさや無常を映し出す道具でもあった。 → 愚者の鏡

「昼間の騒ぎと市場の喧噪がおさまり静まりかえったとき、全く別の生活が始まります。いろいろな想念が湧き起こり、昼間の苦勞の多い官職と戦いの疲れから少し元気を回復し、あたたかも知恵のフクロウのように書物の山に目を向け、ローマ人や古ドイツ人の歴史に自分を映してみるのです。」 → 賢者の鏡

(1496年にボーテが知人にあてた手紙より)

ボーテの本にもとづくティル・オイレンシュピーゲルの一生

1300年ごろ、ブラウンシュヴァイク近郊の小さな村、クナイトリンゲン(Kneitlingen)に生まれる。父は農民とされているが、隣村の盗賊騎士に仕える身分の低い兵卒であった可能性が高い。洗礼親は隣村の盗賊騎士。洗礼を受けた日に、小川に落ち泥まみれの体を家の大鍋で洗ってもらった。1日に3回洗礼を受けたとされる所以である。まともな人間は一生に一度洗礼を受けるだけである。人生の始まりにおいて、数奇な運命を暗示するできごと。

子供の頃からいたずらに精をだしたので、あくたれだと村人から嫌われる。尻を見せたり、舌をだす。母親は、マクデブルクの南方ザーレ川ぞいの村の出身。一家で母親の実家へ引っ越し。まもなく父親死亡。16才になったティルは、手に職をつけて欲しいという母親の願いとは裏腹に、道化や奇術の真似事に夢中。ザーレ川の上を綱渡りして、母親に綱を切られる。嘲笑する見物人への復讐を企て、再び綱渡りをするといって見物人を集め、まんまと彼らの靴をだまし取り、空中から落として見物人を大混乱におとし入れる。

まもなく放浪の旅に出かけたティルは、盗賊騎士を手始めに、商人、司祭、領主、司教、王、教皇、さまざまな職人の親方、旅籠の主人、農民、病院長、学者、修道院長などを、言葉遊びや揚げ足とり、意表をつく言動で、やりこめながら一生を過ごす。彼の機知をおもしろがる者もいるが、大半のものは、はらわたが煮えくりかえる思いをする。オイレンシュピーゲルは尻に帆かけて逃げ出し、次の町でまた騒動を起こすのである。



病を得てやってきたリューベック南方にある町メルン(Mölln)の聖霊施療院が、オイレンシュピーゲルの終焉の地となった。

死後4週間たったら遺産のつまった箱を開けて仲良く分けるようにと、司祭や参事会員、友人に遺言した。いざ箱を開けると石ころしかなかった。遺産をねらっていた連中は、だれかが出し抜いて盗んだと思腹をたてた。

棺を墓穴に降ろすときは紐が切れて縦に落ち、立ったままの姿勢で葬られた。1350年のことである。墓碑には、「なんびともこの石を動かすことなかれここにオイレンシュピーゲル葬られて立つ」と書かれた。

注：メルンの教会にある墓碑は、ボーテの民衆本が人気を呼んでから建てられた。現在の墓碑が当時のものかどうかは不明。

参考文献

阿部謹也訳 「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」、岩波文庫、1995年、ISBN 4003245512

阿部謹也著 「中世を旅する人びと」 平凡社 1978年

Hermann Bote „Ein kurzweiliges Buch von Till Eulenspiegel“ Insel Verlag ISBN 978-3-458-32036-9

Erich Kästner „Till Eulenspiegel“ Dressler Verlag ISBN 978-3-7915-3572-2

ポーテの描いたオイレンシュピーゲル像

誰をばかにしたか (96 話中)

傲慢な親方、いばっている職人 (含む女将さん) 24 話 司祭 (含む料理女) 11 話
教皇 1 話 修道院長 1 話 ベギン会修道女 3 話 女信者 1 話
強欲な旅籠 (居酒屋) の主人・女主人 13 話 商人 3 話 オランダ人 1 話
農民、村人 13 話 領主 4 話 学者、博士 3 話 病院長、医者 2 話
参事会員 1 話 市民 4 話 ワイン差配 1 話 泥棒 1 話 盲人 1 話
道化・奇術師 2 話 ユダヤ人 1 話 浴場主 1 話 理髪師 1 話 夜警 1 話

誰に好意をもたれたか

トリアー大司教、ブレーメンの司教、マクデブルク司教、デンマーク王、ポーランド王
(気晴らしの相手として歓迎された) 見物人 (高慢な者や小心者をからかう様子を楽しんだ)

苦手としたもの

子供、阿呆 (ものを直観で見抜く力を持つ) いたずら者 (負けるわけにはいかない)
おそらく女性 (浮いた話はでてこない)

武器

軽い身のこなし、言葉の意味をすりかえる機転、冷静さと醒めた目、我慢強さ、高いプライド
排泄物を自在にあやつる力 (96 話中 17 話が糞、1 話が屁、4 話が尻に關係)

オイレンシュピーゲルは、どのような姿をしていたか



図-1



図-2



図-3

1. メルン市参事会堂にかけられていたティルの絵 (15 世紀後半?) 右手に小さな道化が入ったジョッキ、左手に彼に手玉にとられた人々の入った籠をさげている。腰にはナイフと財布。足元の動物は、道化帽をかぶった犬。美男に描かれている。ポーテの話のいくつかにも立派な美青年として登場する。
2. 塔守をしていたという話の舞台であるベルンブルクの城と、旅人の格好をしたティル。
3. 1938 年に出版されたケストナーの児童書の表紙。ティルは、道化の姿で描かれることが多かった。



図-4



図-5



図-6

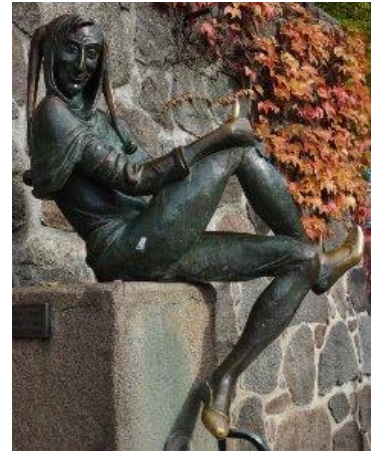


図-7

4. 「終焉の地」メルンの聖ニコライ教会にあるオイレンシュピーゲルの墓碑といわれる石碑。ポーテの民衆本が世に出た後の1530-1550年頃作られた記念碑らしい。上着の裾に鈴がついているのは道化の印。
5. ブラウンシュヴァイクのかつてパン職人が固まって住んでいた地区にある泉。1906年建立。第二次世界大戦で周囲の建造物は破壊し尽くされたが、奇跡的にこの泉は無傷で残った。目を閉じている。
6. クナイトリンゲンの「生家」の前の立像。第二次世界大戦中にナチの要請で作られ、戦後ここに設置された。彼の人気を利用しようとしたらしいが、ポーテがユダヤ人を嫌っていたことと関連があるのか。
7. 1950年、オイレンシュピーゲル「没後」500年記念に作られたメルンの泉。先に鈴がついた長い突起があるかぶり物は、代表的な道化の衣装である。親指をさわると幸運がおとずれるといわれる。

なぜ、ポーテの民衆本がベストセラーになったのか？

グーテンベルクの活版印刷技術の発明(1450年)により、出版社を兼ねる印刷業者が急速に増えた。

→ 発行部数の増加、迅速な各国語への翻訳が可能となる。→ 多くの人の目にふれる。

複数の伝承をたくみにまとめて、架空の人物をあたかも実在したかのように作り出した。

*1230-40年頃 デア・シュトリッカー作『司祭アーミス』から、5話

*1470年頃 ナイトハルト・フックス作 『カーレンベルクの司祭』

*居酒屋で遍歴の職人たちが酒の肴に話す各地の親方の評判、似たような悪戯者の話

世相を諷刺した話は、当時の特定の人物や事件と関連づけて読む楽しみも提供した。

ブラウンシュヴァイクの毛皮匠、エアフルト大学の教授と学生、物見遊山気分のローマ巡礼者

放浪の旅で主人公が訪れるさまざまな都市の見聞録としての側面も、読者の関心を引いた。

アインベック(Einbeck): ビールの産地として有名。→ホップという名の飼い犬を煮る。

バンベルク(Bamberg): 美食の地として有名。→上等な料理を無銭飲食。

リューベック(Lübeck): よそ者に対して厳しい法律。→ワインをだましとり、死刑を宣告される。

ニュルンベルク(Nürnberg): 聖霊施療院には、無料の宿と食事を求め、多くのおしよせていた。

→偽医者、患者を治して退院させるといって礼金をせしめる。